

ファウストへの誘い

友田 孝興 (教授・ドイツ文学)

「日本におけるドイツ年2005/2006」これを記念して、昨年10月1日より23日まで、フランクフルト・ゲーテ博物館所蔵の貴重なオリジナル名品100点余りを集めた「ファウスト展」が大谷大学博物館において開催された。専門の研究者ですら見たこともない稀覯本や絵画や楽譜等が数多く出品された今回の展覧会は、日本のみならず、ドイツ本国においても、質量共に、これまでにその前例をみない、瞠目に値するものであった。「フランクフルト新聞」が、大谷大学でのこの展覧会のもつ文化的・学術的交流の意義と成果を、「日本はフランクフルトの最も偉大な息子(ゲーテ)を愛してくれている」と題して、大々的に報道していたことから、そのことが首肯され得るであろう。短期間の開催ではあったが、3500人近くもの入館者が得られたことは、今は亡き大庭米治郎先生以来のドイツ文学の伝統を承継ぐ本学にとっては、無上の名誉であり大きな喜びであった。

以下、ファウストへのより良き理解のために、幾つかの展覧品を提示しながら(大谷大学博物館発行の展覧図録『ファウスト 伝説と作品—フランクフルト・ゲーテ博物館の名品—』参照。提示番号は本図録の出品解説番号に拠る)、その概略を辿ってみよう。

ファウストは実在した 宗教改革で有名なルター(1483-1546)とほぼ時を同じくして、魔術の行使によって悪名を馳せたファウスト博士(資料ではファウストゥス、1480?-1540?)なる人物がドイツに実在していたことは、同時代の優れた学識者にして修道院長も務めたトリテミウス(1462-1516)の1507年8月20日付のラテン語の手紙(005)や、

『マルティン・ルター博士の卓上語録』(008-2)等が証している。

白魔術と黒魔術 当時のルネサンス期の社会にあっては、自然科学的な術知を行使する「自然知の実践」としての錬金術やその他の自然魔術(医術・占星術・幾何算術・自然の地水火風の哲理等の神秘学)は、一方において、悪魔の妖術(神の定めた秩序への違背行為)とみなされる限りにおいては「黒魔術」として否定されたのであるが、他方、神の尊厳を傷つけない限りにおいては、それを「白魔術」として許容せざるを得ない、そんな時代状況にあった。かくして魔術は、異端審問を逃れるために、アグリッパ(1486-1535)の『隠秘哲学』(024)に代表されるような、キリスト教との総合を求める新しい自然哲学として展開して行くことにもなる。

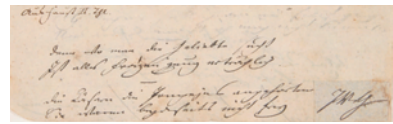
最初のファウスト民衆本 このような時代状況のなかで、大言壮語する山師にして黒魔術師と目されたファウストの死後、魔術に関する書物と共に、数多くの地獄堕ちを主題にしたファウスト伝説本が現われる。このことは、宗教改革とルネサンスとの、神への信仰と自由なヒューマニズムとの緊張・相克関係のなかで、時代がファウスト像の形成と発展を要請し、一方では彼の否定さるべき黒魔術師としての像を拡大させ、一方では彼に民衆の叶わぬ夢を託したのだと見ることもできるであろう。そしてやがて、これまでの断片的な史料や伝承を集大成する形で、1587年に『世に知られた黒魔術師ヨハン・ファウスト博士の物語』(013)という最初のファウスト民衆本が生まれてくる。この書は、以後のファウスト民衆本の基底を成すと共に、自分

の精神的能力と「天地の奥の奥を窮め尽くそう」とする認識目標とのギャップを克服するために悪魔と契約を結ぶのだ、という新しい思想を作品のなかに組み入れたところにその特質があり、転換期の時代の問題性を色濃く象徴している。そして、信仰を蔑ろにした神からの離反者の最期はこんなにも悲惨な地獄墮ちが必定であるぞということ、民衆本らしく真面目さと遊びとを織り交ぜながら垂訓的に描くのであるが、しかし問題の核心は、ルネサンス的な巨人ともいべきファウストによる、知への衝動としての好奇心の果てしなき拡大にあった。

ゲーテの『ファウスト』 知への衝動は悪として断罪されるべきものなのか。この問題性に60年の歳月をかけて応えたのがゲーテである。自ら魔術書に興味を覚え、ファウストの人形芝居や民衆本に親しんできた彼は、これまでの300年にわたるファウスト前史を踏まえつつ、その地獄墮ちの伝統像を打ち破り、自己の宗教観をもってファウストを救済してしまうのだ。

物語の展開に先立つ「天上の序曲」において、先ず彼は、ルター訳『聖書』の『ヨブ記』(043)にならい、ファウストに救済の方向性を与える。この前提に立って、第1部の前半において、レンブラントの名画「錬金術師」(030)にヒントを得ながら、人知の無力さに絶望し、ついにはメフィスト（フランス語版にドラクロワが見事な挿絵を数多く描いている045）の甘言に乗り、悪魔との契約に至る学者ファウスト（シェフェールの絵画059）の悲劇を描き出す。後半はグレートヒェン悲劇と呼ばれる部分である。魔女の秘薬によって青年に変身したファウストとグレートヒェンの愛の喜び（モーリッツ・レッチュの挿絵075-6）、と悲しみ（ペーター・コルネーリウスの挿絵082）。そして彼との間に生まれた私生児殺しの罪を、誰に転嫁することもなく、その一切を神の裁きの手に乗せる彼女と、そ

れに対する神の救済の声（前掲101）。実に悲しくも美しい結末の描写である。これらの筋の展開が名画によって視覚的に捉えられるところに、今回の展覧の感動的特色があった。そしてゲーテの自筆原稿（038）やシューベルトの自筆楽譜（084）等がその感動により一層の喜びを与えてくれた。是非とも、今一度、図録を見ながら作品を読み返し、ゲーテの詩的世界の偉大さに触れていただきたい。そして第2部におけるファウスト自身の救済の意味を考えてくだされば幸いである。



(038)



(030)



(059)



(045)



(075-6)



(082)